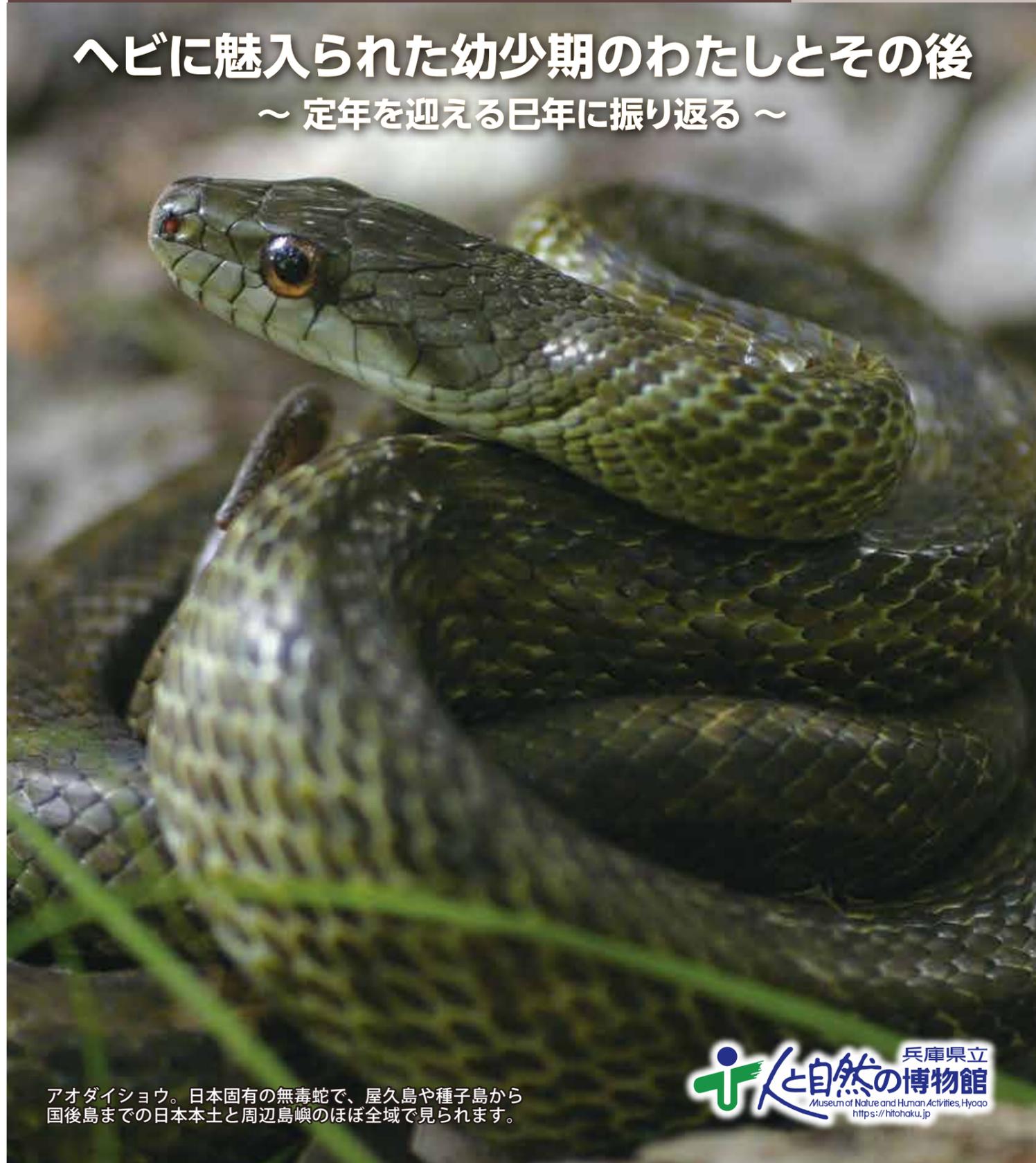


ハーモニー

へびに魅入られた幼少期のわたしとその後 ～ 定年を迎える巳年に振り返る～



コラム 初のホロタイプ標本寄贈 山本将也植物標本コレクション2024

山本将也さん(兵庫教育大学講師)は、日本の様々な絶滅危惧植物の研究をされています。ひとはくの植物標本庫にも度々調査にお越し頂いており、最近執筆とシソ科タツナミソウ属植物の研究を一緒に行っています。昨年の10月ひとはくに来館され、タツナミソウ属のDNAサンプルと一緒に標本を寄贈いただきました。渡し際に「タイプ標本なので」と仰っていたのですが、包みを開けると山本さんが記載されたシモキタコ



写真1 シモキタコザクラ(山本将也氏撮影) 写真2 シモキタコザクラ ホロタイプ標本

ザクラ(写真1)のホロタイプ標本が出てきてびっくりしました。(写真2)タイプ標本とは新規分類群を設立するとき指定する、学名を担保する学術的に大変重要な標本です。アイソタイプ、パラタイプなど幾つか種類がありますが、ホロタイプ標本は最重要標本であり信頼性の高い標本庫に送ります。ひとはくの植物標本の中には100点近いタイプ標本がありますが、ホロタイプは、元々ひとはくにあった標本と研究員が新種記載した植物の2点だけでした。山本さんがひとはくにホロタイプ標本を寄贈下さったこと、嬉しくて涙がでそうになりました。

高野 温子(自然・環境評価研究部)

トピックス 博物館のお仕事「植物標本整理」

植物標本とは、乾燥させた植物を採集地、採集日、採集者などの情報を記入したラベルと共にラミントンテープという熱を加えると裏面の糊が溶ける特殊なテープで台紙に貼り付けたものです(写真3)。

ラベルは台紙の右下にと決まっていますが、植物はラベルを隠さないようにして、

- 1. 自然に生えているように見えるように
- 2. 花や実がよく見えるように
- 3. テープをなるべく目立たせず植物を邪魔しないように

ということに気を付けながら貼ることが大事です。



写真3 植物さく葉標本



写真4 植物標本制作の様子

テープは、茎や幹にピッタリ添わせて貼らないと経年で端から浮いてくることがあるので、コテで熱を加えてしっかりと貼りつけます(写真4)。テープをたくさん付けると標本が綺麗に見えなくなりますし、少なすぎると標本が浮いて葉や花を痛めてしまいますので適度が難しいです。今後も大事な標本を丁寧に貼付けたいと思います。

佐藤 順子(自然・環境評価研究部)



ヘビに魅入られた幼少期のわたしとその後 ～定年を迎える巳年に振り返る～

きっかけとなった父の何気ない行動

私がヘビに初めて興味を持ったのは小学校2年生の頃でした。ある春の休日、当時住んでいた愛知県春日井市の農地を父と散歩中、目の前に現れたヤマカガシ(写真1)を父が捕獲し日本酒の空瓶に入れて見せてくれたことでした。当時の実家は水と緑と小動物の豊かな田園地帯のど真ん中にあり、そのためヘビが出ることも珍しくなかったのですが、そのたび周囲の大人たちは怖がって大騒ぎ、(それを見た子供たちも大人に習って騒ぎ)、その辺に落ちている棒切れなどで追い払い、あっさり叩き殺してしまうことさえ珍しくありませんでした。工学分野の研究者だった父はこのような先入観に満ちた蛮行には批判的で、「ヘビもただの野生動物であり、毒蛇ででもなければいたずらに怖がる必要はないことを教えるいい機会と、捕獲してみせたのだ」と後に言っていました(ただし父が捕獲して見せたヤマカガシは、当時は無毒蛇とされていたものの、後の研究でマムシやハブを凌ぐ毒を持つと判明するのですが…)。この父の行動が、生き物に対する好奇心の塊であった当時の私に、その意図をはるかに凌ぐ甚大な影響を



写真1 ヤマカガシ。日本に固有の毒蛇。私がヘビに興味を持つきっかけとなりました。

残すこととなります。それから、ヤマカガシが放されるまでの数日間、私は朝に晩に時間の許す限り酒瓶の中のヤマカガシと睨めっこを続け、すっかりその神秘的な姿かたちや行動・振舞いに魅了され、ヘビに対し特別な興味を抱くようになったわけです。

夢中でヘビの飼育観察を続けた小・中・高校期

私はほどなくして、近所に廃棄されていた業務用大型冷蔵庫の内壁の箱型プラスチック部分を取り出し、それに網戸をかぶせて蓋にすることで、ヘビを飼育するための大型ケージを作成しました。以後、自宅周辺の田畑からアオダイショウ(表紙写真)、シマヘビ(写真2)、ヤマカガシ、ヒバカリ(写真3)などを次々と集めて来てその中に幽閉し、飼育観察のまねごとをはじめたのです。ヘビを水の入った容器と共に中に閉じ込め、子供の頭で思いつく限りの餌になりそうなもの(ニワトリの卵や雛、カエル、フナ、鼠取りにかかったドブネズミやクマネズミなど)を放り込みました。そして得られた結果から、いろいろなことを学びました。まずヘビという生き物は、十分に落ち着いた状態でなければおいそれとは食べ物を口にしないこと、落ち着き空腹なはずでも脱皮前には食欲がなくなること、空腹の時でもヤマカガシは鳥の雛やネズミにはまったく興味を示さずカエルや小魚ばかり食べること、逆にアオダイショウは雛やネズミは食べるけどカエルは気が向かないと食べず、小魚にはまったく興味を示さないこと、シマヘビはネズミもカエルも食べるほかたまに共食いもし、ま

た他種の小型個体(アオダイショウの幼体やヒバカリなど)も食べてしまうこと、そして同じ種のヘビでも個体によって神経質さや攻撃性に著しい変異があること、などなど。こうした学びの日々のとどめは、ヘビがとてつもない脱走の名人であるということでした。それは小学6年生の夏のある日、飼育ケージをみると40頭近く入っていたヘビが3頭しかおらず、他は材質の劣化でできたケージの穴から逃げ去っていたのです。この経験は、直後に両親より落とされた大目玉、そしてその後しばらくご近所で頻発したヘビ騒動ともども、強烈に印象に残っています。その後、父・母の補助のもとでしっかりした飼育ケージを作成した私はヘビの飼育を再開し、飼育技術を向上させつつ、中学・高校を通してヘビの観察を続けたのでした。

希望進路は飼育家から研究者・教育者へ

このような幼少期の経験に始まったヘビへの興味・関心は、その後ヘビ以外の爬虫類や両生類へも広がり、受験予備校、大学、そして大学院と、気の合う友人ら、そして理解ある恩師の方々にも恵まれてますます深まって行きました。はじめの頃は、これらの動物の飼育下での繁殖を目標にし、就学後は飼育展示施設(名古屋市立東山動物園)に職を得ることを考えていました。しかし、そのような計画、人生設計は進学と共に爬虫類や両生類の生物学的研究を一生涯続けられる職を探し、また関連分野に興味を有する後進を、自分の経験に基づいて育てて行きたいとの内容へと変貌して行き、今に至ります。



写真2 シマヘビ。日本固有の無毒蛇で、いろいろなものを食べ、たまに共食いもします。



写真3 ヒバカリ。目立たない小型の無毒蛇で、オタマジャクシやミミズなどを食べます。

退職にあたって

ほどなく現職の定年を迎えるこの巳年に、これまでお世話になった恩師の方々、同僚・友人諸兄、名目上は研究指導をしたことになっただけながら、その実、私自身がはるかに多くの学びとモチベーションをいただいた学生・院生諸君、そして何より幼少の頃、時にひどく戸惑いながらも精いっぱい私の学習を応援し支えてくれた両親に、心より感謝したいと思います。

太田 英利(自然・環境評価研究部)